

今年度から3年間、再度 IAML 日本支部長を仰せつかることになりました。なにとぞよろしくお願ひします。実は前支部長荒川恒子先生の前に、1999年から3年間同じ支部長を務めたことがありますので、復活再任ということになります。今回は副支部長を藤堂雍子さん、事務局長を松下鈞さん、会計を森佳子さんがそれぞれ務めて下さることなので、極めて強力な役員会が成立しました。支部長としても誠に心強く感じているところです。新役員の皆さんにも、この場を借りてよろしくお願ひする次第です。

考えてみればこの IAML 日本支部も、1979年に設立されてから来年で30年を迎えることになりました。その間初代支部長遠山一行先生、2代目故渡部恵一郎先生、前支部長荒川恒子先生、そしてその他の委員皆さんのご努力もあって、会員数も次第に増えると同時に、活動の内容も多面化し、社会に貢献する機会も多く与えられるようになったような気がします。特に昨年11月10日に、パネリストに文化庁の小倉信宏氏を、コメンテーターにニッセイ基礎研究所の柄田明美氏を迎え、日本音楽学会、日本音楽図書館協議会と共同で開催されたシンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」は誠に画期的な会議となり、将来に向けてのわれわれの役割が極めて重要であることを改めて認識した次第でした。今後とも、日本に存在する音楽資料の保存と管理に関しては、日本音楽やヨーロッパ音楽に限らず、その他あらゆる種類の音楽についてしっかりと考えていかなければならない問題であることを確認し、会員の皆さんにも出来る限りのご協力をお願ひする次第です。

また一方、IAML 本部との協力関係も従来極めて理想的な関係が続いていますが、それもますますこれからも盛んな方向へ向って推進したいと考えております。そもそも IAML という団体は、毎年異なる地域での会場で国際会議を行っているという点では極めてユニークな存在であると常日頃思っていました。たとえば昨年まで私が日本代表を務めた国際音楽学会などは、5年に1度しか正式な大会を行っていません。それを考えると IAML 本部がいかに活発な活動を目指しているかが分かり、その意欲に敬意を払わずにはられません。しかもその毎年の会議がいかに充実して素晴らしいものであるかは、それに参加した方々の証言によって明らかです。前回私が支部長を務めた3年間も、ニュージーランドのウェリントン、英国のエジンバラ、フランスのペリゲーと魅力溢れる都市での開催でしたが、私自身は残念ながらいろいろな事情で参加出来ませんでした。今年はイタリアのナポリで開かれ、私は家庭の事情で行けませんでした。日本からも多くの参加者があり、素晴らしい会議であったというメッセージを頂戴しました。来年はアムステルダム、その後もモスクワ、ダブリンと続きますが、ひとりでも多くの日本からの参加者を期待したいと思います。

(かなざわ まさかた IAML 日本支部新支部長、国際基督教大学名誉教授)

第 44 回 IAML 日本支部例会

「日本支部の課題」

(2008 年 5 月 24 日 於: 東京芸術劇場小会議室)
司会進行: 荒川恒子

企画について / 荒川恒子 (p.2)
シンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」その後 / 林淑姫 (p.2)
慶應義塾大学 DMC 機構における音楽資料のデジタル化研究の状況 (報告) / 美山良夫, 篠田大基 (p.3)
RISM の状況 / 樋口隆一 (p.5)
RISM in Japan?? / 長谷川由美子 (p.6)
音楽図書館員教育の現状と課題 / 伊藤真理 (p.6)
転換期を迎えた音楽資料の目録作成とそのシステム / 加藤信哉 (p.7)

▶ 企画について

荒川恒子

第 44 回例会を上記のような内容により、報告および座談といった方式で行うこととしたには、それなりの理由があります。筆者が日本支部長の任に就いたのは 2002 年 6 月でした。それから 6 年間、学びつつの務めでした。初めて支部長として参加した 2003 年のタリン会議で、日本支部の活動年間報告をするために、過去の『Fontes Artis Musicae』に改めて目を通しました。その後の 5 年間に国際会議および『Fontes』における支部報告の扱いは、大きく変わったように感じられるのです。会議においては特別の枠が設けられ、報告のために出席する支部長が目立つようになりました。またその後雑誌に掲載するために、原稿を提出する支部の数は明らかに増加しています。同じ IAML の支部といっても、支部のあり方、構成メンバー、規模、活動の仕方、問題点等は異なります。本部ではそれらをありのままに受けとめてくださっています。また国際会議開催国の支部状況は、そこで取り上げられるテーマや内容にも、如実に反映されています。逆の言い方をするならば、IAML 日本支部はどのような活動をすべきかに関して、本部からの指示を待つ、またはその意向を汲もうと切磋琢磨するばかりでなく、自ら考え活動すべき時がきているのではないか、ということです。

この 6 年間筆者は委員の方と共に、ルティーンである Newsletter の発行、例会の開催、ホームページの更新をこなしながら、IAML 日本支部の活動のあり方を検討してきました。他の学会では聞けないまたは取り上げられない、IAMLらしい例会のテーマとはどんなものであろうか、何度も討論を行ないました。それではこの 6 年間に取り上げられた話題、また活動にはどのようなことがあるのでしょうか。一応の区切れ目として、次の委員会への引継ぎの意味も含めて総括しておこう、というのが本例会の趣旨でした。当日話題となったことに関しては、適任者より御報告のある通りです。加えて図書館の現場におられる方より、今まで委員会ではほとんど話題としなかった実情の御説明もうかがえ、なごやかな会となりました。支部長を再度お引き受けくださった金澤正剛氏より、このように総括してみると、何も動いていないように感じられる資料を取り巻く環境にも、確実に前に向かって進んでいる面があることがわかります。とのコメントをいただきました。恒例となった楽しいおしゃべりの懇談会なども、意見や実情の報告交換の場として定着しました。本協会が活発で気軽に躍動する人の集いの場であり続けるよう願っています。

(あらかわつねこ 前支部長 山梨大学)

▶ シンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」その後

林淑姫

昨年 11 月の合同シンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」は、9月に発表された文化庁委嘱「音楽情報・資料の保存及び活用に関する調査研究」報告(ニッセイ基礎研究所)を受ける形で企画された。2年にわたる調査研究の成果として刊行された『報告書』の内容に対して、より積極的な提案を望む声も聞かれたとはいえ、政府による史上初の音楽資料・情報に関する総合的な調査自体大いに注目されるものであった。音楽資料に対する政策が欧米諸国に比して立ち遅れていることの指摘、国会図書館「音楽部門」再検討の要請、また多様な音楽情報の集積法としてのポータルサイト構築に向けた提案など、広く一般の関心を呼

び起こす具体的な内容を備えていることを評価したい。

文化庁、国会図書館の担当者を迎えて開催されたシンポジウムの席上確認されたことは、国がこのことがらについてどれ程関与しうるかあるいは関与の意志があるか、という問題とは別に、音楽資料にかかわる団体および個人の姿勢もまた問われるということであったように思われる。とすれば、こうした機会は今後とも折にふれ設けられ、さまざまな視点から繰り返し話し合われることによって具体的な方向性がみえてくるように思う。

課題は依然として2点に集約される。①音楽資料、とりわけ日本の文化遺産としての音楽資料の保存と整理、②資料の共有、活用のためのデジタル化を含む方法論、である。問題は具体的なひとつひとつのことからにある。②について言えば、長く懸案であった南葵音楽文庫資料が慶應義塾大学によってデジタル化されつつあるというニュースは近来にない朗報であった。また国立音楽大学のRISMへのデータ提出は「RISM国内委員会」設立の動きに弾みをつけるものでもあろう。①についても、最近、東京藝術大学で日本近代音楽資料の整理・公開が進められていること、また日本音楽著作権協会に作曲家自筆稿の保存を検討する部署が置かれたことなどを聞いている。事態は少しずつながら動いているようである。今後の展開を期待したい。

付記・国のかかわりについても進展がなかったわけではない。本年3月末、2日にわたって参議院文教科学委員会で審議された。公明党議員による「音楽資料の保護、支援」に関する質疑に対して文化庁、国会図書館および文科副大臣の答弁があった。国政の場で論議の対象となったことに注目したい。(質疑・答弁の内容は国会図書館のサイトで読むことができます。<http://kokkai.ndl.go.jp> 国会会議録→参議院・文教科学委員会・会期「平成20年3月25日～3月27日」、キーワード「音楽」で検索)

(りん しゅくき 日本近代音楽館)

* 5月24日例会配布文書に補筆していただきました。シンポジウムの詳細については前号をご覧ください。

▶ 慶應義塾大学 DMC 機構における音楽資料のデジタル化研究の状況 (報告)

美山良夫(慶應義塾大学 DMC機構 PL)
篠田大基(慶應義塾大学 DMC機構助教)

慶應義塾大学は、JST を通じて、文部科学省科学技術振興調整費の交付を受け、デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構(以下 DMC 機構)を設立、各キャンパスにスタジオを設置、海外拠点を整備してきた。その事業は多岐にわたるが、百科全書のデジタル化とともに、プロジェクトのひとつとして、音楽資料のデジタル化研究が採用された。プロジェクト・リーダー(PL)と助教、RAら4名という小規模なスタッフであり、また資金の性格が助成ではなく委託費であるため使途が厳しく制限されている。そのため、外部の助成金や民間からの寄附金を獲得して研究を遂行している。

研究の範囲には、海外におけるデジタル化の状況調査も含まれるが、むしろ知的財産権に関する問題群のソリューション、メタデータに関する国際標準とローカル・ルール、画像収録における技術、ファシリティ、スタッフの専門的スキル(貴重資料のハンドリングやダメージ回避のノウハウ)、画像等の閲覧に資するアプリケーションや活用モデルを、Google や学術リポジトリ、openDOAR の動向を見据えながら構築するという実践的な課題が中心になっている。

上記諸課題のなかでも、とりわけ資料所有者とデジタル化実施者が異なる場合の契約モデル作成は、非常に大きな労力を必要とした。メタデータに関しては、ダブリンコアを基礎に、DMC 機構として慶應学術メタデータのシステムを試作した。しかし、音楽資料にローカライズするには依然多くの課題をかかえている。一方、画像収録に関しては、慶應義塾所蔵グーテンベルク聖書高精細デジタル化の経験をいかしたスタジオや人材に恵まれた。

本研究の実施にあたっては、財団法人読売日本交響楽団の協力により、同団所有「南葵音楽文庫」利用が当面可能になった。現在までに、同文庫所蔵の貴重資料を収録したマイクロフィルムのスキャニングを完了し、また高精

細デジタルカメラによる資料の新規撮影も進めてきた。

1. マイクロフィルムのスキャンング

対象：リプリント未出版の印刷本を含む 197 本
進捗：102,651 コマ (2007 年 2 月完了)
画質：白黒 2 値 A4 400dpi
ファイル形式：TIFF

南葵音楽文庫に所蔵されている全 260 本からなるマイクロフィルムには、ネガフィルム 1 セットとポジフィルム 2 セットの合計 3 セットがある。本プロジェクトにとって、デジタル化作業における検討課題のひとつは、このうちのどれをスキャンングするかであった。マイクロフィルムは、通常ネガをマスターにして作成されるため、南葵音楽文庫の場合もネガの 1 セットがマスターと推定される。マスターフィルムは保存用であり、スキャンングに使用すべきではない。しかし一般には、ポジよりもネガを用いてスキャンングする方が精細な画像が得られる、ともされている。

そこでネガ・ポジ双方のスキャンング画像の比較をプロジェクト内で行った。その結果、細部の再現性においては、たしかにネガフィルムから得られる画像の方が優れていることが確認されたが、文字や音符の読みやすさに関してはむしろポジの方が優れており、ネガから作成した画像には、フィルムに十分な量の走査光が透過しなかった場合に本来黒い部分が白く欠けてしまうという問題が起こることも判明した。このことは最悪の場合、四分音符と二部音符の判別ができないなど、音楽資料としては致命的な欠陥になり得るため、本プロジェクトでは、文字や音符の読みやすさと正確さを優先させてポジフィルムをスキャンングすることとし、2 セットのうちで傷の少ない方を選んでデジタル化を進めた。

白黒 2 値、A4 の 400dpi という画質も読みやすさを重視して設定した結果である。本プロジェクトがマイクロフィルムからのデジタル化の対象に選んだのは印刷本であった。黒 1 色で印刷された資料であれば、白黒 2 値であっても研究には十分利用可能である。また解像度の

400dpi は印刷物図版の画質を基準としている。

2. 資料の新規撮影

対象：手稿・インクナブラ 99 点および関連資料
進捗：50 点 2,926 カット
画質：2,200 万画素
ファイル形式:RAW(オリジナル)・JPEG(作業用)

インクの色や濃淡などの情報が重要となる手稿資料については、実物の再撮影を進めている。

資料撮影においては、安全面を考慮して貴重資料を撮影用スタジオに持ち出すことはせず、撮影チームが出張して所有者立会いのもとで作業を行っている。そのため、撮影画像の画質のみならず、運搬する機材の量や撮影の作業スピードについても勘案する必要があった。実際の撮影作業においては、事前に撮影対象資料の状態と大きさを確認した上で状態が良い資料を優先して比較的サイズが近い資料をまとめて撮影するようにしている。撮影作業は数人のスタッフで行い、カメラ操作、資料保持、画像確認、ファイル名管理などを分担することで効率化を図っている。

本プロジェクトが使用しているカメラは PhaseOne H25 である。これらの高精細デジタルカメラ・システムによる撮影では、カメラとパソコンを接続して撮影画像をカメラから直接パソコンに転送し、ハードディスクに保存する方法をとる。したがって、作業速度はファイル転送速度やパソコンの処理速度に依存する。現在ではより高画素のデジタルカメラも登場しているが、本プロジェクトが 2,200 万画素という画質を設定した理由は、出張撮影という作業条件に合わせて画質と作業効率とのバランスをとった結果である。

3. 画像閲覧方法の検討

以上に述べたマイクロフィルムのスキャンング、および資料の新規撮影によって得られた画像は、データの正確さと信頼性を確保するため、オリジナルのデータに対しては画像補正を行わないようにし、バックアップをとって保存している。

現在、貴重書デジタルアーカイブでは、研究用の高精細画像とともに解像度を下げてファイルサイズを軽くした一般閲覧用画像の2種類を作るのが主流になりつつある。そこで本プロジェクトでもそれぞれの目的に合わせ、研究用には Adobe Photoshop Lightroom、一般閲覧用には Logosware Flipper という2種類の画像ビューワの採用を決定した。
(本稿は、5月24日 IAML 日本支部例会のための報告文を本誌掲載用に改訂したものである)

本プロジェクトに関する問い合わせ先
music-library@dmc.keio.ac.jp

プロジェクト研究誌『Oxalis —音楽資料デジタル・アーカイビング研究』を7月に刊行。希望者は上記アドレスへ。刊行後輸送料などをお知らせします。部数に限りがあります。DMC 主催プロジェクト報告会の予定は、上記のアドレスに配信希望を寄せられた方に決定次第通知します。また、かつての南葵楽堂および南葵音楽文庫における音楽を再現するコンサートを2009年2月1日に都内で開催する予定です(主催:音楽フロンティアみなと再発見コンサート実行委員会、助成:港区文化芸術振興基金)。コンサートやイベントの詳細につきましては、随時メールマガジンにてご連絡差し上げます。こちらの配信ご希望の方は nankigakudo@gmail.com までご連絡ください。

(みやま よしお, しのだ ひろき)

▶ RISM の状況 (2008年)

樋口隆一

フランクフルトの RISM 本部は、新しいデータ入力プログラム「カリスト」Kallist を開発した。2007年7月にスイスのアインジーデルン修道院で行われた RISM 国際会議の主なテーマはこのプログラムの説明であった(第31号、19~23頁)。

帰国後、RISM のホームページを見ると、すでにチュートリアルも掲載されており、次々クリックしていくと、入力の実際がヴァーチャル体験できるようになっている。そのマニュアルも、まずドイツ語版 Richtlinien がチュートリアルと

同時にアップされ、さらにイギリス支部が作成したという英語版 Compendium も2008年3月に完成し、これもホームページから参照することができる。たしかに、従来のマニュアルよりはるかに簡単になったが、それでもなかなか分かりにくいのはたしかだ。こういうものはやはり日本語で書かれていないと、実用にはならないだろう。そこで私は、今年の秋学期から、自分が教えている明治学院大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程の学生たちと、日本語版マニュアルの作成を試みている。メンバーは、テレマンの初期受難曲を研究している加藤拓未君、初期のワーグナー自筆譜について研究している小林幸子さん、アイルランドのハーブについて研究している寺本圭佑君、リゲティの《グラン・マカーブル》について研究している佐藤仁美さん、そしてワイマール音楽大学から日本の現代音楽を研究しにやって来たシュテファン・メンツェル君である。それぞれ研究テーマは異なるが、資料研究を基礎としているので、このような面倒な仕事からも学ぶことが多いだろうと思ったのである。

4月からは、ボンのベートーヴェン・ハウスからエルンスト・ヘルトリヒ博士を招聘教授にお迎えして、モーツァルトやベートーヴェンの資料研究に関するゼミを共同で行っている関係で、RISM マニュアルの仕事は少し中断しているが、現在だいたい半分くらいは完成している。難事業だが秋からはペースを速め、なんとか今年度中には完成したい。

RISM 本部のホームページは、日本のニュースも載るようになった。『IAML ニュースレター』第31号に樋口が執筆した「RISM プロジェクトの現状——アインジーデルン国際会議を中心に」のことをカイル所長に教えたところ、なんと Aktuelles の項目にリンクを張ってくれ、全文が読めるようになっている。その説明がおもしろいので紹介しよう。「日本語ができる人はここ(リンク)で読むことができます。その他の人は、とても美しい日本の文字と、たくさんの写真をお楽しみ下さい」。カイル所長の発表風景が、けっこう格好良く写っていたので、喜んでくれたようだ。こんなことも異文化コミュニケーションの第一歩だろう。昨年のアインジーデルン国際

会議でも、「初めて日本から来てくれた」と大歓迎されたが、RISM の活動についての報告が日本のニュースレターに載ったということも、彼らにとっては大ニュースなのかもしれない。

最近はまだ、RISM 本部の紹介で、ドイツ・リュート協会から、南葵音楽文庫所蔵のリュート・タブラチュアに関する質問のメールが送られてきた。さっそく美山良夫さんに転送して善処をお願いしたいのである。こういうちょっとした情報交換のキャッチボールが気楽に行えるようになったのは、国際的 IT 社会の良いところである。

本年度から金澤正剛先生が IAML 日本支部の委員長になられたのは、RISM の活動にとっても良いことである。今年こそはぜひとも金澤先生の音頭取りで、RISM 日本支部を正式に誕生させたいと思っている。

(ひぐちりゅういち 明治学院大学)

▶ RISM IN JAPAN??

長谷川由美子

この報告では筆者が長らく仕事でかかわってきた日本における西洋の音楽資料について述べることにする。

日本に RISM 支部のような組織は必要ないのだろうか？私は「あったほうがよい」と考えている。

その理由は、第一に RISM 本部の活動は今後筆写資料中心となるため、『18 世紀以前の個人作曲家』(A1 シリーズ)、『18 世紀以前の曲集』(B2 シリーズ)、『18 世紀以前の音楽書籍』(B6 シリーズ)に関する日本国内の資料把握ができないためである。書籍や楽譜の題名がわかれば NACSIS Webcat を通じて約 600 の大学図書館の蔵書が検索できるが、国立音楽大学を始め参加していない図書館も多く不完全である。また、音楽という主題で検索をかけても出てくる資料は少ない。音楽図書館員としては、音楽学研究の基礎資料となるべき楽譜や書籍の所在が一箇所でわかる必要性を強く感じている。その基礎となる目録は、既存の RISM のデータが使用できるだろう。国内の所在情報が加わったサイトが IAML や音楽学会、音楽

図書館協議会と共同して作成される事を切に望んでいる。各館が別々に冊子の形で出版、あるいはネット公開している情報が一箇所に集中する必要性は、取り入れるばかりだった世界の音楽情報について日本からの発信につながるだろう。

第二としては筆写資料や RISM が対象としている 1800 年以前の印刷資料(特に楽譜)や、筆写資料の目録化の困難性が挙げられる。参考にするべきマニュアルがないわけではない。不完全なマニュアルであっても、多くの資料を取り扱ううちに経験が蓄積されてくるが、日本の多くの図書館では資料がまったくないか、あったとしても少数で、これは少数の機関をのぞいて期待できない。また、筆写資料について正直に言うと、最初に筆写資料を目録化する必要に迫られた時に私が感じたことは、「出来れば避けて通りたい」であった。おそらく、どこの音楽図書館員も同様に考えるだろう。初期楽譜や筆写資料の目録化が図書館員ではなく、多くは学者の仕事とされる点もこの気持ちに拍車をかける。それを軽減してデータを提出してもらうには「相談機関」が必要なのである。私は目録作成の際(筆写資料や初期楽譜とも)、さまざまな資料を使い、また、必要に応じて音楽学のスタッフのアドバイスを期待できた。

このような「相談機関」を RISM 日本支部に期待したい。

(はせがわ ゆみこ 国立音楽大学附属図書館)

▶ 音楽図書館員教育の現状と課題

伊藤真理

○ 現状

毎年 1 万人の司書資格取得者が生産されているが、我が国では「司書」とは、公共図書館の専門職を指す。図書館情報学の専門課程を持つのは 3 大学のみであり、現在の司書養成課程は、専門職養成のために十分であるとはいえず、音楽のみならず特定分野の主題専門家を養成する余裕はない。

音楽図書館員の養成は、文字資料だけでなく、楽譜や映像・録音資料も含む音楽資料についての知識とそれらの資料を活用したサービスを

提供するために、主題専門分野に特化した教育が必要であるとされている。現状では、おおまかに次の3つのタイプ、(1)音楽大学を卒業して音楽専門知識を学修した者、(2)個人的に音楽に興味を持っておりある程度の知識を持っている者、(3)音楽に関する知識は少ないが司書資格もしくは図書館情報学を学修した者、が音楽図書館員として業務に携わっている。彼らは、現場の経験から音楽図書館員としての知識とスキルを向上させていくのである。したがって、音楽図書館協議会がこれまで行ってきたさまざまな研修や各機関での個別の研修が非常に重要な役割を持つことになる。

○ 課題

このように職場での研修が重要であるにもかかわらず、図書館員は研修に参加できにくくなってきている。昨今の予算削減などによる事情もあるが、もともと図書館員の専門職制に対する社会的な認識の低さにも原因がある。また、特に大学図書館の館長職はいわゆる名誉職である。図書館運営を担う立場にある館長が、図書館について全くの素人なのでは、職員の専門職性についての理解や継続教育に関する対応は難しい。今回の例会でも特に注目されている国内の貴重資料の保存と提供について、専門家による活動が期待されるが、以上のような現場での状況から、その知識やスキルを活用することがきわめて困難であることがわかる。

そこで、図書館が専門職を必要とする組織であると位置づけるために、館長自身の図書館経営に関する研修を行うことが望まれる。また、数年の任期で交替してしまう館長では、図書館の組織としての長期計画を立案することが困難であるのは容易に推測できる。短期間に要点を把握するには、図書館サービスや専門職教育など日本よりも制度的に整っている国際的な動向を理解することを期待したい。大学図書館では職員よりも自由に活動が可能な教員である館長が、海外事情の伝達の役割を担ってみるという方法も考えられるのではないだろうか。

○ 参考文献

加藤修子. 図書館・情報学教育に於ける音楽

分野の主題専門教育. 音楽図書館協議会編. 『音楽情報と図書館』大空社, 1995, p. 12-25.

市川啓子. 我が国における音楽図書館員の養成と研修: その問題点と方向性を探る. 音楽図書館協議会編. 『音楽情報と図書館』大空社, 1995, p. 26-48.

松下 鈞. The Role of the Music Library Association of Japan in the Education of Music Librarians. *Fontes Artis Musicae*, 1989, vol. 36, no. 2.

(いとう まり 愛知淑徳大学)

▶ 転換期を迎えた音楽資料の目録作成とそのシステム

加藤信哉

2007年度から国立情報学研究所の学術コンテンツ運営・連携本部 図書館連携作業部会の下に設置された次世代目録システムWGに国立大学図書館のメンバーとして参加している。このWGが設置されたのは2009年4月および2013年度に予定されている目録所在情報サービスであるNACSIS-CAT/ILLのリプレイスに関連して中長期的な視点から目録システムのあり方を検討するためである。

2008年3月には「次世代目録所在情報サービスの在り方について(中間報告)」¹⁾が公表された。この中間報告では、「資料」——特にERMS(電子情報資源管理システム)との関連、「システム」——特にデータ構造、データ作成基準、「運用」——発生源入力、今後の運用方式を柱として議論が展開されている。

だが、音楽資料について言及された部分は皆無である。そのため、中間報告の公表後の6月6日に行われたNIIオープンハウス2008

次世代学術コンテンツ基盤ワークショップ『次世代の目録所在情報サービスを考える』の参加者から「現在は図書と雑誌の総合目録であるが、その他の媒体(地図、写真、音声資料など)について、どのように考えているのか、言及されていないように思う。」という意見があった。

ところでNACSIS-CATに音楽資料に追加するための仕様の検討とシステムの改造は1990

年度に行われ、その際には前年度に提出された東京芸術大学附属図書館や音楽図書館協議会目録専門委員会の助言や提言も参考にされているが、2) その後、音楽資料の入力を必ずしも音楽図書館が積極的に行ってこなかったように思われる。このため、NACSIS-CAT 我が国の大学図書館が所蔵する音楽資料を網羅的に検索できないし、さらに商用の図書館システムでは音楽資料の特性に配慮した OPAC システムの開発が進んでこなかったのではあるまいか。

NACSIS-CAT がこの 20 年間に共同分担目録作業による図書や雑誌の総合目録の形成と相互利用の進展に果たした役割は非常に大きいといえよう。一方中間報告で触れられているように NACSIS-CAT は標準化、国際化への対応に迫られていることも事実である。音楽資料のデジタル化とインターネットによる情報

発信が進んでいる現在、改めて音楽資料の目録（メタデータ）作成とシステムについて幅広い観点から見直す時期に差し掛かっていると考えられる。

なお、「次世代目録所在情報サービスの在り方について」の最終報告は 2008 年度にまとめられる予定となっている。

注

1) <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/pdf/next_cat_interim_report.pdf> から入手可能。

2) オンラインシステムニューズレター No.25 (1990/8/31)
<<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/PUB/nl/nl-25-01.html>>

(かとう しんや 東北大学附属図書館)

2008 年総会報告

日時 : 2008 年 5 月 24 日 (土) 午後 1 時半 ~2 時半
場所 : 東京芸術劇場小会議室

出席者 : 荒川恒子、伊藤真理、加藤信哉、金澤正剛、佐藤みどり、末永理恵子、関根和江、関根敏子、藤堂雍子、長谷川由美子、樋口隆一、森佳子
委任状提出者 : 伊東辰彦、植田栄子、加藤修子、金井喜一郎、加納マリ、刈屋公延、菊池修、佐古純子、佐々木勉、杉本ゆり、手代木俊一、寺本まり子、鶴園紫磯子、土田英三郎、遠山一行、友利修、福中冬子、星野宏美、細田勉、正木光江、松下鈞、美山良夫、三田智子、森節子、米田かおり、林淑姫、上野学園大学音楽・文化学部図書館、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪芸術大学図書館、国立音楽大学図書館、東京音楽大学附属図書館、同志社女子大学・図書情報センター、同朋学園大学部附属図書館、桐朋学園大学音楽学部附属図書館、名古屋芸術大学附属図書館、日本近代音楽館、フェリス女学院大学附属図書館

出席者名 12 人 + 委任状 37 通で総会成立 (会員総数 : 個人会員 60 団体会員 18 の過半数)
開会の辞 : 荒川恒子 支部長
議長選出 : 加藤信哉

I・報告事項

1) 会員の異動

退会 — 松橋麻利氏、茂手木潔子氏、ステューヴン・ネルソン氏

入会 — 小倉洋子氏、友利修氏、三田智子氏、斉藤容子氏

2) 2007 年活動報告 (資料 1 参照)

3) 2007 年会計報告と会計監査報告

会計報告は (資料 2 参照)

承認

会計監査林淑姫氏より以下のコメントが寄せられた

無駄なくお金を使っているが、必要と思われるところに適正な支出がなされるべきであろう

4) 選挙結果報告 選挙委員長 関根和江

投票数 37 で、すべて有効

結果

(獲得票が同数の場合は委員による無作為抽選)

支部長 (1 名)

金澤正剛 15

次点 : 樋口隆一 10

副支部長(1名)

岸本宏子 12(辞退)

次点:藤堂雍子 9

(投票後辞退は原則不可であるが岸本氏の新たに生じた事情から辞退をやむをえないと委員会で判断し、次点繰り上げ当選)

事務局長(1名)

松下鈞 13

次点:藤堂雍子 10

役員(4名)

伊藤真理 16

関根敏子 13

土田英三郎 13

加藤信哉 12

次点:末永理恵子 11

5) 会員会議参加補助用基金への応募結果

森佳子氏から応募、承認

6) ニュースレター発行報告と内容

担当役員:佐々木勉、関根和江、森佳子

第30号 2007年6月25日発行

国際音楽資料情報協会(IAML)日本支部

2007年総会報告

IAML日本支部第43回例会報告

近代日本における音楽専門教育の成立と展開に関する研究

音楽取調掛時代楽譜受入/所蔵状況の概要:関根和江

東京音楽学校時代の演奏曲目と楽譜所蔵状況との関連について:大角欣矢

第31号 2007年9月25日発行

IAML Annual Conference Sydney, Australia July 1-6 2007:荒川恒子

IAML 2007 Sydney:藤堂雍子

国際音楽資料情報協会(IAML)シドニー会議報告:茂手木潔子

日本の公共図書館での音楽情報サービス:伊藤真理、松森隆一郎

RISMプロジェクトの現状—アインジーデルン国際会議を中心に:樋口隆一

第32号 2007年12月25日発行

IAML日本支部第44回例会報告:小倉洋子
ニュース 南葵音楽文庫資料のデジタル化:
長谷川由美子

役員改選のお知らせ(関根和江)

7) ホームページ

→活動報告

II・協議事項

1) 2008年活動計画(資料1参照)

承認

2008年予算案(資料3参照)

承認

意見:RILM事務局長より

RILM編集の実費負担とした項目名は
Fontes編集の実費負担に変更をお願い
したい

項目名を変更する(本紙挟込の資料3では修正済)

質問:本部の新会計に支部会費の過払いに
ついて、引継ぎが済んでいるか?

答え:済んでいる

質問:本部会費はいつ値上げされるか

答え:2010年の予定

3) ナポリ会議への代表参加者

次期役員で、ナポリ会議への出席が予定され
ている役員(副支部長)である藤堂雍子氏に
決定

III・2008年度事務局員と会計の指名、
新役員紹介、会計監査承認

1) 新役員会は事務局委員と会計に次の方々を
指名し、総会の承認を得た。

会計 森佳子

事務局員 末永理恵子

2) 支部長より新役員紹介

支部長:金澤正剛

副支部長:藤堂雍子

事務局長:松下鈞

役員:伊藤真理 加藤信哉 末永理恵
子 関根敏子 土田英三郎 森佳子

3) 会計監査

関根和江

(記録:長谷川由美子)

資料 1

2007 年活動報告と 2008 年活動計画

	2007 年度報告	2008 年活動計画中間報告
国際会議	シドニー会議 2007 年 7 月 1-6 日 出席者：荒川恒子、伊藤真理、井上公子、藤堂雍子、樋口隆一、茂手木潔子、上法茂、三田智子 代表出席者：荒川恒子 発表： *伊藤真理 MUSIC INFORMATION SERVICES AT PUBLIC LIBRARIES IN JAPAN *茂手木潔子 教育、継承、創造活動における日本の伝統音楽の現在	ナポリ会議 2008 年 7 月 20-25 日 出席者（予定）：荒川恒子、石田康弘、伊藤真理、藤堂雍子、関根和江、関根敏子、樋口隆一、森佳子 代表出席者：藤堂雍子 発表： *山田高誌 国立音大所蔵のナポリ版 II Matrimonio segreto 新発見（プログラム委員会：世界のイタリア 18 世紀マニュスクリプト） *伊藤真理（公共図書館部会、ビジネスミーティングでの発表）
総会	2007 年 5 月 19 日（土） 場所：東京芸術劇場小会議室 内容：活動計画、年間予算	2008 年 5 月 24 日（土） 場所：東京芸術劇場小会議室 内容：活動計画、年間予算、選挙結果報告
役員会	第 1 回：3 月 5 日（月）（東京文化会館） 第 2 回：5 月 7 日（月）（東京文化会館） 第 3 回：10 月 22 日（東京文化会館）	第 1 回：4 月 16 日（東京文化会館）
例会・集会	第 42 回例会 5 月 19 日（東京芸術劇場） 「近代日本における音楽専門教育の成立と展開に関する研究—中間報告：東京音楽学校附属図書館の明治期までの所蔵状況を中心に」 関根和江氏 大角欣矢氏 総会后懇親会 第 43 回例会 11 月 10 日（土）音楽学会、音楽図書館協議会と共催 「日本の音楽資料・情報を考える」 コーディネーター 林淑姫	第 44 回例会 5 月 24 日（東京芸術劇場小会議室） 「日本支部の課題」 司会進行 荒川恒子 1. RISM について 2. 昨秋の合同例会について 3. 南葵音楽文庫のデジタル化（慶応義塾大学）について 4. 日本の音楽資料情報 日本の RISM HP での紹介（Indexing of Archive） 5. 図書館員教育と指定管理制度・アウトソーシング時代の音楽図書館
ニューズレター 詳細は I-6) を参照	第 30 号 2007 年 6 月： 第 31 号 2007 年 9 月： 第 32 号 2007 年 12 月：	
ホームページ更新 *ニューズレター掲載	4 回 3 回	
その他	本部への会費送金(2007 年 6 月 14 日) MLAJ を通じ図書館年鑑に IAML 活動記録提出	明治大学の図書館学授業 専門図書館論 「ミュージック・ライブラリー」音楽情報の参考資料に、IAML ホームページトップの URL 引用表記

■訃報 小川昂氏

4月14日、日本の音楽司書の草分け、小川昂氏が逝去されました(享年96)。N響、NHK資料室で活躍され、1956年には、上法茂氏とともに、日本人初のIAML会員となりました。音楽図書館界での指導的な役割を果たされ、民音音楽資料館の立ち上げにも尽力されました。

一方、楽書、オーケストラの定期公演の記録等の膨大なデータ収集・整理に尽くされ、『日本の交響楽団』『洋楽の本』をはじめとする基礎資料を多数編纂され、多大な功績を残されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

■図書館法が改正されました

平成20年6月、第169通常国会において社会教育法の一部改正が行われ、これに伴って図書館法と博物館法の一部が改正されました。

<http://www.jla.or.jp/tosyokanhou2008/index.html>

図書館法改正のポイントは、

第3条、図書館の収集する資料として「電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他の知覚によっては認識できない方式で作られた記録をいう)」の追加、

第5条、司書となる資格要件を満たす司書講習に加えて「大学を卒業した者で大学において文部科学省令で定める図書館に関する科目を履修したもの」の追加、

第7条、「文部科学大臣及び都道府県教育委員会は司書及び司書補に対し、その資質向上のために必要な研修を行うよう努めるものとする」、「図書館の設置及び運営法望ましい基準を定め、これを公表する」(第7条2)、「図書館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき図書館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努めなければならない」(第7条3)の追加などです。

このうち第5条の「大学において履修すべき図書館に関する科目」については、文部科学省内に設置されている「これからの図書館の在り方検討協力者会議(第3期)」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/index.htm)で検討されています。また、JLA(日本図書館協会)からも6月13日に文部科学大臣に対して「図書館法改正に基

づく司書養成の省令科目について」(<http://www.jla.or.jp/kenkai/20080613.pdf>)が提出されています。詳細については、上記で紹介したURLをご覧ください。(文責・松下鈞)

■「麻布飯倉 南葵楽堂の記憶」第2回コンサート(予告)

本紙5頁でも紹介されている、南葵音楽文庫と南葵楽堂の再現コンサートの詳細をご紹介します。

●日時: 2009年2月1日(日) 14時開演予定

●場所: JTアートホール アフィニス

●演奏曲目:

パーセル 歌劇「デイドとエネアス」より(カミングス校訂版による)、ヘンデル オラトリオ「メサイア」より(南葵音楽文庫カミングス・コレクション手稿楽譜による再現)、ほかを予定

曲目は、徳川頼貞が、1917年ロンドンのオークションで落札したカミングス・コレクションから、彼が研究していたパーセルやヘンデル作品を中心に選曲された、とのこと。また、イベントとして、**9月13日(土) 10時より**、港区立男女平等参画センターで、南葵楽堂の設計にあたったウィリアム・メレル・ヴォーリズと音楽とのかわりをめぐる芹野与幸氏(一粒社ヴォーリズ建築事務所経営管理室室長)のお話なども予定されています。入場予約、お問い合わせ、およびメール・マガジン配信ご希望の方はnankigakudo@gmail.comまで。

秋の催し物

◆2008-09-11(Thu)~12(Fri) 國學院大學 渋谷キャンパス 第69回(2008年度)私立大学図書館協会 総会・研究大会「大学図書館と博物館・文書館との連携」
<http://www.jaspul.org/>

◆2008-09-13(Sat) 慶應義塾大学 三田キャンパス 三田図書館・情報学会 2008年度月例会(第137回)「大学図書館建築と新しい経営コンセプト」
<http://www.soc.nii.ac.jp/mslis/monthly.html>

◆2008-09-18(Thu)~19(Fri) 神戸ポートアイランド 第94回全国図書館大会兵庫大会
<http://www.library.pref.hyogo.jp/taikai2008/top.html>

◆2008-09-27(Sat) 慶應義塾大学 三田キャンパス 三田図書館・情報学会 2008年度研究大会
<http://www.soc.nii.ac.jp/mslis/annual.html>

◆2008-10-25(Sat)~26(Sun) 国立音楽大学 第59回日本音楽学会全国大会
http://www.soc.nii.ac.jp/mjsj4/activity/activity_main.html

■ IAML Newsletter no.29

本部の電子版ニュースレター、IAML-NL は、現在 IRCAM のメディアテーク・ディレクターが編集担当で、毎月ヴィヴィッドなニュースが掲載されていますが、このたび最新号の第 29 号がアップされました。IAML2008 ナポリ会議の特集号です。http://www.iaml.info/publications/newsletter/IAML-NL-29.pdf をごらんください。

■ IAML-L へのお誘い

IAML-L は本部のメーリングリストです。上記のような電子版ニュースレターがホームページにアップされたお知らせや、各種の最新情報が届くほか、入手の難しい資料の入手方法についての質問等も可能です。レファレンスや選書にも役立つことでしょう。

lyris@cornell.edu宛に、タイトルなしで本文に「SUBSCRIBE IAML-L "Firstname Lastname"」と書いて送ると登録完了のメールが届きます。詳しくは、http://www.iaml.info/publications/iaml-l をご覧下さい。

■ 2008 年度会費納入のお願い

1 月 1 日から新会計年度が始まりました。会費未納の方は、ゆうちょ銀行振替または銀行振込でご送金ください。年会費と振込先は以下の通りです。

●年会費 個人 6,000 円 団体 14,000 円

●振込先

ゆうちょ銀行 00130-5-75629 IAML 日本支部

三菱東京 UFJ 銀行 六本木支店

普通 1089206 IAML 日本支部 (イムルにシブ)

代表 森佳子

連絡先の変更も併せてお知らせください。

IAML 日本支部会計係 森佳子

e-mail ***@***.ne.jp

■ 会員の活動情報をお寄せ下さい

ニュースレターの内容の更なる充実のため、会員の皆様より情報を募集することにいたしました。自薦他薦を問いません。研究会や演奏会などの催し、出版等、広く会員向けに告知したいことなどを下記担当宛にお寄せください。

ニュースレター担当 末永理恵子

@.or.jp



事務局だより



■新役員

新役員のメンバーと役割分担は、下記のとおりです。

支部長 金澤正剛

副支部長 藤堂雍子

事務局長 松下鈞

会計 森佳子

例会 土田英三郎(チーフ)、加藤信哉、関根敏子

ホームページ 伊藤真理

ニュースレター 末永理恵子

■事務局への連絡

IAML 日本支部事務局住所は、日本近代音楽館 気付となっておりますが、お急ぎのご連絡は下記事務局宛に直接お願い申し上げます。

事務局長：松下鈞 ***@***.com

==== Postscript =====

新役員に交代して最初のニュースレターをお届けいたします。編集担当も交代しましたので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第 44 回例会は参加者全員がテーブルを囲んで、IAML 日本支部周辺の動きについての情報と意見の交換を行った、有意義な会となりました。本紙掲載の報告は、企画と司会を担当された荒川前支部長からいただいた原稿と、そこで配られた資料 2 種の再録(いずれも執筆者による加筆・修正あり)、並びに主要な発言・報告をされた出席者をお願いした原稿によって構成いたしました。

次号はナポリ 2008 の特集号です。どうぞお楽しみに。(末永理恵子)

Newsletter - 国際音楽資料情報協会日本支部
第 33 号

2008 年 9 月 6 日発行

発行 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒106-0041 東京都港区麻布台 1-8-14

日本近代音楽館気付

http://www.iaml.jp